

## ノイエスだより

ノイエス朝日(朝日印刷工業株式会社)

群馬県前橋市元総社町七三-15

TEL 027-2555-3434

FAX 027-2555-3435

http://www.neues-asahi.jp

一月もあつという間に過ぎ、庭の花木にもいくらか春の兆しを感じられるこの頃となりました。

ノイエスの新春特別企画「かがやく石川のKOGEE」では、荒川文彦(漆芸)、川北浩彦(木竹工)、坂本康則(漆芸)、多田幸史(陶芸)、吉田幸央(陶芸)、四ツ井健(染色)の六氏をお迎えして、初日のオープンングでは来廊された皆様と作品や制作について心ゆくまで歓談されました。群馬は初めてという作家がほとんどで、雪の石川から来県された作家たちは青空がうらやましい・・・と笑顔で語っておられました。今回の展示で伝統的な仕事に新しい技法を取り入れた作品やその手法を事細かに説明していただき、スタッフも大変勉強になりました。日本海側の天候が搬入時、搬出時は例年になく大雪との事で、心配でしたが何とか無事に終了することが出来ました。

二〇二〇年の一月にも第二回展を開催する予定です、今回作品を鑑賞出来なかつた方は是非その機会を楽しみにして下さい。

\*

太平洋戦争の末期、群馬県の中央部(旧群馬町)に陸軍の飛行場が急造されました。その名称は「陸軍前橋飛行場」。地元の人たちは「堤ヶ岡飛行場」と呼んでいました。近くには八世紀に建てられた国分寺跡もあります。旧飛行場近くの鈴木越夫さんは、「陸軍前橋飛行場と戦時下に生きた青少年の体験記」を出版されました。(第一集〜四集)

昨年、映画「陸軍前橋(堤ヶ岡)飛行場」製作協力委員会が発足し、前橋出身で数々のドキュメンタリー映画を監督している飯塚俊男氏があたっています。完成は、今年の夏の予定です。

緊急に飛行兵を養成するために田畑が強制買収され、教育訓練用の飛行場として作られた「陸軍前橋(堤ヶ岡)飛行場」を知る人々の声や飯塚俊男監督が言う「記憶を記録に」。八十歳〜九十歳代の方が語る言葉をよりリアルな歴史として、多くの皆様にご覧になっていただければと思います。詳細につきまして、ノイエス朝日までご連絡下さい。

(パンフレットをお送り致します。)

\*

ノイエス朝日では、毎月の展覧会のご案内状と「ノイエスだより」をご希望の方に郵送しています。

お電話にて登録を受けておりますので、お気軽にお問い合わせ下さい。お待ちしております。

## ノイエス朝日(展覧会)のご案内

## 上杉一道個展 ― 青い風景 ― (企画)

会期 二月十七日(土)〜二十五日(日)

午前十時〜午後六時

会場 ノイエス朝日 スペース1・2

高崎の「広瀬画廊」や「はまゆう山荘」で上杉さんの作品を拝見した懐かしい思い出があります。

「青の風景」の中に誘い込んでくれるような優しさがあがり、いつしか、その描かれた道や風景の中を散策している自分がある・・・そんな発見があります。

自然の中で戯れている上杉さんの姿も思い浮かびます。

人はいつでも健康で何の不自由もなく生活していけるものと誰もが思い込んでいますが、自分の身体に変化が生じた時にどのように対処していけるか・・・これは「人が生きていく」上でとても重要なことです。

上杉さんと何度かお話をしていて、大きなものを抱えながらも自分なりに少しでも前を向く姿勢にホッとさせられました。それは、自分の生き方にも重なります。

多くの人が「何かを抱えている」時、作品を作り出すという創造の力が家族や友人の励ましで、どんなに新しいものを生み出していけるか出来るのか。

今回の作品の中に答えがしっかりと刻み込まれていることでしょう。0号〜150号の油彩、デッサン四十数点を展示します。お誘い合わせの上、お出かけ下さい。

## 下田紀史個展

(企画)

会期 三月三日(土)〜十一日(日)

午前十時〜午後五時三十分(最終日は五時)

会場 ノイエス朝日 スペース1・2

「新たなスタートを機に、より深く豊かな表現を追求したい」と語る下田紀史氏のSM〜100号のアクリルによる作品三十数点を展示致します。

下田氏の新たな作品の数々をお楽しみ下さい。

## ちょっと、図書館通い

約二十年間、本屋さんに勤めていたので普通の人より蔵書が多いのは当然ですが、だからといって読書量が多いわけでもなく、自宅の一部屋は積本がいくつもできている状態で整理もされずに引越をしたままの状態です。

それでも相変わらず本屋さん通いはしているし、それに図書館通いもしています。借りられる本の冊数をしっかり布袋に入れ、寝る時に聞く睡眠導入剤の落語のCDもじっくり確保する日々です。

図書館に行くと、まず新刊にざっと目を通して目新しい本をチョイスし館内を一周。数冊抜き取りカウンターへ。

昨日は、一月二十五日に発行された横尾忠則「創造&老年」という本を発見。副題には「横尾忠則と9人の生涯現役クリエーターによる対談」とあります。

瀬戸内寂聴、磯崎新、野見山暁治、細江英公、金子兜太、李兔煥、佐藤愛子、山田洋次、一柳慧の九名。

好奇心をそそられました。

以前の仕事の関係で一柳慧氏は遠くから何度かお会いし、サントリーホールでのコンサートにも行き、細江英公氏の作品は三島由紀夫「薔薇刑」の写真展を実施した折に手にした記憶があり、他の作家の作品も何度も見ることがあり、また小説やエッセイなども読む機会を与えられました。

横尾忠則氏が「はじめに」に書いているように七十歳になった頃から「したいこと」しかししない生き方に切り替えられなにかと思ひ、それから健康になっていくように思えた。

そして病院のお世話になることもあったが、絵を描くことによつて快復をうんと早めることができた。どうやら創作が身体の中にエネルギーを発生させていることに気づいた。

と書いています。この言葉は多くの作家たちを勇気づける魔法の言葉です。九人のクリエーターと関わりがある人々、そして九人の書籍を呼んだり、講演を聞いたり、音楽を聴いたり、作品や映画を見たりした人々に、「自分はどう生きたらいいか」の問いかけとともに秘かな答を暗示してくれるかもしれません。

長年、一線で創作活動をしてきている人の声(言葉)は貴重な人生哲学です。

機会がありましたら是非一読を・・・。

(武藤)